

"Britain in Japanese anime: truth, fiction, fantasy"

「日本のアニメに描かれたイギリス：真実、虚構、ファンタジー」

キャサリン・バトラー（カーディフ大学）

菱田信彦（川村学園女子大学）訳

長いこと私は日本とイギリスの関係に興味を抱いてきました。先人たちと同様、私は日本とイギリスに多くの共通点があることに気づいていました——あるものは重要であり、あるものは些細なものかもしれませんが。どちらも島国で、その国に言語、文化、宗教などにおいて多大な影響を与えた大陸のすぐ近くに位置し、しかも自らを大陸から明確に区別しています。ともにお茶、作法、天候、庭園などに関心があり、行列を作るのが好きです。それでも多くの明確な違いもあります。そしてイギリスの旅行者は、日本でさまざまなカルチャーショックを経験します。

他の文化に自分たちと違う点を発見することは——家に入るとき靴を脱ぐ習慣であれ、本のページを左から右へめくることであれ、また温かい便座でさえ——自分たちの文化を新たな目で見ることにつながります。それは、ふだん慣れきって当たり前だと思っていた習慣が変容し、とつぜん見知らぬもののように見えてくる経験をすること、すなわち自分の文化を外から見ることに役立ちます。言いかえれば、私は日本を学ぶことによってイギリスを学んでいるのです。さらにいうなら、慣れ親しんだものと親しみのないものとの組み合わせ——いわば酸いと甘いを噛み分けるような感覚——は、私にとって日本の魅力のひとつです。

このように、私はイギリス人が日本人をどう見ているか、そして日本人がイギリス人をどう見ているかの両方に関心を抱いていますが、この両者はいわばコインの裏表です。私は、イギリス人と日本人のお互いに対する理解がどういう点で正しく、どういう点で間違っているかということではなく、むしろそれぞれが相手の国を想像や創作のためにいかに「利用」しているかということに興味があります。今日は、このことを念頭に置いて、日本のテレビ版や劇場版のアニメにおいてイギリスがどう理解（そして誤解）されているかについて、私の気づいたことをお話ししたいと思います。とりあげるトピックは主に次の三点です。

1. 日本——東洋の不思議の国？
2. ファンタジーとしての英国
3. スタジオジブリとイギリスのファンタジー作品

1. ファンタジーと不思議の国——日本を見るイギリスの視点

まず、イギリス人が日本をファンタジーの舞台として見てきたということについて少し述べましょう。ファンタジー文学には不思議の国がつきものですが、イギリス人の心象の中では、日本はつねにあいまいな位置にありました——それは現実の場所でもあり、空想の世界でもあったのです。

その歴史は少なくとも、1726年に出版されたジョナサン・スウィフトの『ガリバー旅行記』にまでさかのぼります。スウィフトの作品では、イギリス人レミュエル・ガリバーが多くの架空

の国を訪れます——小人国、巨人国、そして口をきく馬の国。三度目の航海で彼が訪れるのは、空飛ぶ島ラピュータ、またバルニバービ、ラグナグ、グラブダブドリッブ、そして……日本です。ガリバーが描写する土地はすべてスウィフトの空想の産物ですが、日本だけが例外なのです。

ガリバーは次のように記しています。

私たちは日本の南東部に位置するザモスキ（下総？）という小さな港町に上陸した。町は西に向いた岬の上であり、そこから狭い湾が長く北方へと伸びて、湾の北西部に江戸、すなわち首都がある…

作品のこの場面を知らない方は、ガリバーが日本滞在中ずっとよい待遇を受けていると聞いて嬉しく思われるでしょう。彼の滞在はそれほど長くはありませんが（すぐに「ナンガサク／長崎？」からヨーロッパに向けて出港しています）、彼の他の到着地はすべて架空の場所だということを考えれば、ガリバーが日本を訪れたということ自体が奇妙だと思いませんか？

実はこれはそれほど不思議なことではないのかもしれませんが。結局のところ、スウィフトが『ガリバー旅行記』を書いた時代、イギリス人が日本へ渡ることは鎖国政策のせいではほとんど不可能だったのですから。日本は未知の神秘的な国であり、妖精国と同じぐらいたどりつくのが難しいところだったのです。ひょっとしたらそれが、架空の土地についての作品にスウィフトが日本を描きこんだ理由だったのではないのでしょうか。

1世紀以上後のこと——正確には1862年7月4日のことですが——チャールズ・ドジソン（筆名ルイス・キャロル）が、幼いアリス・リデルと二人の姉妹をつれて、テムズ川をさかのぼる舟旅に出ました。子どもたちを楽しませるためにその日彼が語った物語が後に『不思議の国のアリス』という作品となったのです。この作品は日本でもその故国とほとんど変わらないほど有名なようですね（実際、渋谷の「舞踏の国のアリス：アリスのファンタジーレストラン」のようにアリスの名を冠したレストランで食事したり、原宿の「水曜日のアリス」に続く小さなドアをくぐるために頭をかがめたりできるのは日本だけです。それにももちろん、1980年代にはテレビアニメにもなっています）。

『不思議の国のアリス』は1865年に出版され、またたく間にイギリス中で人気を博しました。17年後、D・C・アンガスという作家が『東洋の不思議の国』（1882）を出版しました。彼はこの作品で同時代の日本をイギリスの若い読者たちに紹介しようとしています。今日ではあまり知られていない作品ですが、その題名はイギリス人が日本のことをどう思っていたかを端的に示しています。アンガス自身はイギリス人でしたが、彼はこの物語の語り手として、しばらくロンドンに滞在している間にホストファミリーから『不思議の国のアリス』を紹介された、1850年生まれ日本人男性を設定しました。この語り手は次のように述べています。

子どもたちはしょっちゅう『不思議の国のアリス』の話をしてくれた。そしてある日私はよく考えもせずこう言ってしまった。「僕が君らを故国につれて行くことができれば、アリスが不思議の国で見たものよりもっと不思議なものを見せてやれるんだがなあ。あれこそまさに不思議の国だよ。」もちろん彼らはあれこれと聞きはじめ、私に向かってアリスが経験した驚くべきことを並べ立てて、これに負けないほど面白いものがあるかと尋ねた。そこで私は知っているかぎりの最も奇妙なこと（もちろんイギリス人にとって奇妙という意味だ）を持ちだし、ときにはアリスをしのぐことに成功したのだ

った。

作品をとおして、作者は日本が「鏡映し」の世界であることをくり返し思い出させます。そこではイングランドではあたり前の規則が逆転しているのです。たとえば、路上の職人たちについて述べるくだりで、彼は次のように書いています。

大工が靴を作り、かご編み職人が帽子を作る。鍛冶屋が足でふいごを動かし、桶屋は桶を足で抑える。仕立屋は手前から向こうへと針を動かし、木挽きは鋸を手前に引く。こんなふうにも、もし君らが仕事をしている人たちを見ながら通りを歩けば、いろんなことを「あべこべ」にやっているとと思うだろうよ。

このように、初期イギリスファンタジーの最も重要な作品のうちの二つを、直接的あるいは間接的に、日本と結びつけることができます。そしてどちらの場合においても日本はある種の「不思議の国」、ファンタジーの世界として登場します。後に日本は「東洋趣味」のイメージーションの題材となっていくますが、その経緯はまた長くて複雑な話になるので、別の機会に譲りましょう。しかし、このようにイギリス人が日本人を見つめている一方、彼らは見つめられてもいたのであり、それが私がここで考察したいことなのです。

2. イギリスについてのファンタジー

イギリスは日本のアニメにいくつかの設定やイメージを供給しています。分かりやすくするため、私はそれらを次のカテゴリーに分けました。

- (1) 「外国らしい」ゆえにこそ魅力的な場所
- (2) 「紳士」と貴族が暮らす土地
- (3) 魔法と魔法学校の本場
- (4) 世界規模の組織（ときには邪悪な、あるいは秘密の）の本拠地

(1) イギリスとイギリス人の「外国らしさ」

「外国らしい」ことの魅力がとくによく表れていると思うのは、テレビアニメ『きんいろモザイク』（制作：Studio 五組）です。最初に放送されたのは2013年で、2010年に連載が始まった原悠衣の4コマ漫画を原作としています。物語の舞台となるのはほとんど日本の高校ですが、最初のエピソードで、当時は中学生だった主人公の忍（しのぶ）がホームステイでイングランドを訪れ、同い年のイギリス人の少女、アリスと友達になります。忍が帰国した後、アリスは彼女がいないのを寂しく思います。彼女はイングランドで日本語を学び、忍や彼女の友達に通う高校に転校してきます。『きんいろモザイク』は彼女らの日本での生活を描くチャーミングな「癒し系」のアニメですが、アリスの故郷の家がしばしば描写されます——南イングランド、コッツウォルズの美しい田園地方にある家です。

まさにD・C・アングスの『東洋の不思議の国』を読む子どもたちが、なじみのない慣習でいっぱい「不思議の国」としての日本に魅了されたように、忍を最初に惹きつけるのもアリスと彼女の家「外国らしさ」なのです。忍がアリスの住むファームハウスに初めて足を踏み入れたとき、アリスの母は彼女に靴をぬぐ必要はないといいます。すると忍は喜んで「外国っポイ！」と叫びます。ここでも、また他の場面でも、イングランドと日本の違いがクローズアッ

プされます。忍がアリスに惹かれる理由の一つは彼女の金髪であり、それがアニメのタイトルにも反映されています（イギリス人で金髪なのは7人に1人ぐらいですが、おそらく日本の人々にとっては最も明らかに「外国らしい」髪の色なのでしょう）。

その一方、アリスは日本の風物、とくに忍自身に魅了されます。この作品の面白い点の一つは、忍がイギリスに夢中なのに対して、アリスは日本に夢中だということです。忍は西洋式のベッドで寝て、アリスは布団に寝ます。アリスの朝食は納豆、ご飯、味噌汁、漬物に焼き魚ですが、忍はベーコン、フライドエッグ、トマト、黒ソーセージ、手作りの英国風ジャムをそえたトーストという伝統的なイギリスの朝食をとります。もちろん「アリス」という名が選ばれたのもたまたまではありません。アリスの金髪は、ルイス・キャロルの原作でジョン・テニエルが描いているアリスと重なります（もっとも実在のアリス・リデルは黒髪で、むしろ忍に似ていますが）。アニメの最初のエピソードは「不思議の国の」と題されてさえいます。この結びつきは作品の早い段階でクローズアップされます。その場面では、忍がアリスからエアメールを受け取り、それを見た友達の陽子が、その手紙は不思議の国から来たに違いないと思ひこみます。もちろん陽子の勘違いはこっけいですが、忍が心に思い描くイギリスも実際は一種の不思議の国なのです。

エキゾチックな場所としてのイギリスに対する忍の関心は、同様の趣味をもつ人々を満足させるためにデザインされた日本のさまざまな場所のことを思い起こさせます。たとえば福島県のブリティッシュヒルズがそうです。これは日本を離れられない（あるいは離れたくない）人々のための「英国風」リゾートで、ホームページで謳っているように「パスポートのいらない英国」です。ブリティッシュヒルズは、城、マナーハウス、テューダー調のパブ、ティールームなど、選り抜きの英国的な場所を提供します。同様に、ヘレフォードシャー州ブロックハンプトンの教会は、大阪で忠実に再現され、日本のカップルが関西地方を離れることなくヨーロッパ風の教会で結婚式を挙げることを可能にしています。もちろん、田園風景の中に建っている元の教会と、高層ビルの20階に位置するそのレプリカは違いますが、いったん中に入ってしまうとそれが何か問題でしょうか？そして九州の湯布院フローラルビレッジがあります。これは2012年にコッツウォルドのある村をイメージして建てられたもので、「Alice in Wonderland」という名の店まであります。

最後に京都府亀岡市にあるドゥリムトン（Dreamton）村に触れておくべきでしょう。これは美しい景観で有名な村、コッツウォルドのカーズル・クームをモデルにしたものです。（ドゥリムトンという名が選ばれたことはたいへん示唆的です。イギリスは現実の国なのでしょうか、それとも、不思議の国がアリスの夢だったように、夢にすぎないのでしょうか。）ドゥリムトン村では、他のこの種の場所と同じように、実在の村について——石のアーチから窓の掛け金まで——詳細に調査し、それを正確に再現することに多大な労力が払われました。イギリス人の観光客にとっても日本人の観光客にとっても、このような場所はどこか「不気味」に感じられるようになることがあります。それは、慣れ親しんだものとなじみのないもの、現実とごっこ遊びの不安定な狭間に落ち込んでいくような感覚です。ドゥリムトン村にいるあなたはイングランドにいるのでしょうか、それとも日本にいるのでしょうか？

現実のイギリスを正確に再現してはいますが、ブリティッシュヒルズや湯布院フローラルビレッジ、そしてドゥリムトン村が提供しているのは非常に偏ったイギリスのイメージです。そこで目にするイギリスには昔ながらの、上層階級の、そして田園地方の建造物しかありません。都心部の産業化され、近代的なイギリスの側面——実際はそうした場所にほとんどのイギリス人が住んでいるわけですが——は欠落しています。同様に、『きんいろモザイク』で提示され

るイギリスの片田舎のイメージも理想化されたものです。コッツウォルズの美しい古びたファームハウスに住んでいるイギリス人はそんなにたくさんはいません。にもかかわらず、このアニメは写実的なものでもあります。それは、製作者がイングランドにアニメの舞台となるべき実在の場所を見出し、それを忠実に再現しているからです。このような場所はどこにでもあるものではありませんが、現実には存在しているのです！たとえばアリスの家は、カースル・クームからわずか3キロほどのところにある、フォス・ファームハウスという実在の18世紀の建物をモデルにしています。現実ではそれはキャロン・クーパーという人によってゲストハウスとして運営されています。アニメ制作者たちはこの建物を厳密に再現するよう注意を払いました。

この点でアニメ『きんいろモザイク』は原作となった原悠衣の4コマ漫画とは大きく異なります。漫画は忍がアリスの家に着くと去るところを描いていますが、そのイメージは現実のコッツウォルズの景色とはずいぶん違います。アリスの家は木材でできているように見えますが、これはイギリスの家の外壁材としてはかなり珍しいものです。さらに奇妙なことに、アリスの村は雪を頂いた山に囲まれています。これは日本の村の光景としてはよくあるものですが、南イングランドでは聞いたことがありません。コッツウォルズはなだらかな低い丘が連なる地域であって、山岳地帯ではありません。おそらく原悠衣はイギリスの風景や建築のことはよく知らなかったのでしょう。もしくは、4コマ漫画という形式では、「家」や「田舎」の大ざっぱな概念を日本の読者に手っとり早く伝えることの方が肝心だったのかもしれませんが。いずれにせよ、漫画をアニメ化したスタジオ五組のチームは、漫画とはまるで違うところに重きをおいたといえます。テディベア型のドアストップ、忍の部屋の愛国心あふれるベッドカバー、そして1954年型モーリス・マイナー（小型乗用車）など細部の描写は、すべてスタジオ五組が2012年に撮影チームとともにフォス・ファームハウスを訪れたときに見たものを誠実に反映させているのです。この年キャロン・クーパーは、エリザベス2世の在位60周年を祝うためにそのベッドカバーを買ったのでした。

アニメが実在の家をモデルにしている一方、その逆もある程度本当だといえます。その家はいまやアニメのイメージを再現している、少なくとも維持しようとしているからです。近ごろはフォス・ファームハウスを訪れる観光客のほとんどが日本人で、その大半が『きんいろモザイク』のファンです。当然ながら、彼らはテレビの中のイメージそのままの姿の家を見たいがります。さらに彼らは、自分たちで好きな場面を演じてそれを写真に収めようとします。キャロン・クーパーは現実のファームハウスの写真にアリスの画像を合成し、アニメのファンタジーを再現した絵葉書まで作っています。キャロンには家の外見を変えない理由が十分にあります。彼女のビジネスの成否は、イギリス文化の非常に限定的な側面を、非常に限定的なやり方——それを見る者が期待し、望むやり方——で提供できるかどうかにかかっているからです。だからといってフォス・ファームハウスの何かが作りものだというわけではありません。多くの人間関係の場合と同じく、これには自意識の問題がからんでいるのです。『きんいろモザイク』のイギリスは、日本人のイギリスにまつわるファンタジーについて多くを教えてください。しかしそれはまた、イギリス人が自分をどう見せたがっているかについて多くを示すものでもあるのです。

ドゥリムトン村のような場所について先ほど私が述べた、ファンタジーと現実の境目に落ち込むような感覚は、イングランドにも存在します。たとえばカースル・クームは本物の村ですが、古風な建物の姿があまりに整っているので、映画のセットのような印象を与えます。私が今年の初めに若い日本人の友人とこの村を訪れたとき、彼女は「本当にここに人が住んでるんですか？」と尋ねました。もちろん住んでいます。しかしこの村は実のところ多くの映画やテレビ

ドラマでセットとして使われてもいて、村はその外見が近代的にならないよう気を配っています。

最近、こうした場所の「絵のような」外見を保つことへのプレッシャーをよく示す出来事が、近くのバイブリー村で起こりました。バイブリーにはアーリントン・ロウという有名な通りがあります。1380年に建てられた家が並び、その美しさは高く評価されて、イギリスのパスポートの見返しを飾る画像にまでなっています。これより明確な国家の推薦を得ている通りはまずありません（アーリントン・ロウは『きんいろモザイク』にもちょっと出てきます）。アーリントン・ロウの家の一軒にピーター・マドックスという引退した歯科医が住んでいます。2015年のこと、マドックス氏は派手な黄色の車を買って、それを家の前に駐車して近隣の人々を仰天させました。その結果、彼は景観を損ない、観光客が撮る写真を台無しにしたと非難されたのです。2017年初めには彼の車は襲撃さえされ、「Move」（「引っ越せ」もしくは「車を移動しろ」）という文字が塗装に刻まれました。この行為は他の黄色い車のオーナーたちを激怒させ、4月には全国から数百人もの人々が黄色い車に乗って集まり、村内をドライブしてマドックス氏への支持を示しました。ここにイギリスの二つの大切な原則が衝突した例を見ることができます。一つは近隣の人々への配慮であり、もう一つは、周囲の景観にそぐわない車を買うことを含めて、自分がしたいように生きる権利です。

ちなみに、マドックス氏は今では黄色い車を手放してグレーの車に乗っており、アーリントン・ロウに平和が戻りました。

(2) 「紳士」と貴族が暮らす土地

『きんいろモザイク』以外にも、アニメが（他のメディアとともに）普及させた根強いイメージのひとつが、イギリスは「紳士」と貴族の住む土地だという観念です。イギリスを題材とするアニメの多くは、大きな屋敷に住み、召使を抱え、貴族の血を引いている高貴なキャラクターを描くことに力を注ぎます。もちろんイギリス人も、イギリスでも日本でも人気のある『ダウントン・アビー』のようなドラマを通して、このようなイメージを維持しています。渋谷の「アリスのファンタジーレストラン」や亀岡のドゥリムトン村へ行くのと同様、池袋の「執事喫茶スワロウテイル」のような執事カフェを訪ればこのようなイギリスファンタジーを体験できます。アニメの例としては『黒執事』（2008年）に言及しておきましょう。これはヴィクトリア時代の裕福な少年シエル・ファントムハイヴと、悪魔の力を持つ彼の執事、セバスチャン・ミカエリスについての物語です。また『ジョジョの奇妙な冒険』第一部（2007年劇場版、2012年TVシリーズ）では、1880年代のイギリスを舞台に、富裕なジョースター家の生活が描かれます。

先ほど述べたように、この種の建物やライフスタイルはイギリスにもそうそうあるわけではありません。『ダウントン・アビー』のような暮らしぶりを期待してイギリスを訪れた日本人は、現実のイギリスにショックを受けることがあります。ウィリアム・ホリングワースは次のように指摘しています。

日本人はしばしばロンドンやイギリスでの生活をファンタジー化し、理想化されたイメージを抱くが、いったんそこを訪れると大いに幻滅することがある。日本人女性の中には、イギリス人の男性が自分の期待していた伝統的イギリス紳士の水準におよばないこ

とにがっかりする者もある。¹

おそらく西洋人の中にも、誰もが伝統的な日本家屋に暮らしていることを期待して日本を訪れ、どの街角にもスターバックスやマクドナルドがあるのを見て驚いた人がいることでしょう。しかし西洋における日本のイメージは、伝統的であると同時に超モダンでもあります。実際、この相反する特質をあわせもっていることが日本の魅力のひとつと見なされているのです。しかし日本におけるイギリスのイメージについては同じことがいえるとは思えません。

(3) 魔法研究と魔法学校の本拠地

イギリスを魔法と、とくに魔法学校と結びつけるイメージは多くのアニメ作品にはっきり示されています。たとえば1999年の魔法少女アニメ『カードキャプターさくら』では、「クロウ・カード」の創り手である魔術師クロウ・リードがさくらに力を与えますが、クロウの母は中国人で父はイギリス人です。両親がどちらも魔術師だったため、西洋と東洋の魔力が彼の中で融合し、彼はとりわけ強大な力をもっています。

イギリスにおいて魔法の学校を題材とする児童文学には長い歴史がありますが、「ハリー・ポッター」シリーズは、このジャンルを世界中に広めたという点で、間違いなくこれまでで最も重要な構成因子でしょう。ハリー・ポッターの強い影響が見られる日本のアニメのひとつが『リトルウィッチアカデミア』です。これは2013年に短編映画として始まり、2017年にTVシリーズになりました。物語は「ルーナノヴァ・アカデミー」という魔法学校にまつわるものですが、この学校はイングランド南西部に位置しています。アカデミーの生徒たちの国籍はさまざまです。主人公のアッコは日本人で、ロシア、アメリカなどから来た若い魔女もいます。しかし、危険と秘密に満ちたイギリスの学校という設定は、賢者の石が出てくることもあり、強くホグワーツを思い起こさせます。また、物語は「レイライン」など神秘的なイギリスの魔術的観念を用いています。そしてアッコの主なライバルであるイギリス人の少女、貴族的な名をもつダイアナ・キャベンディッシュは、古い魔女家系の出身であることに誇りを抱いています。古くからの魔術の中心としてのイギリスの地位を裏づける描写です。

『リトルウィッチアカデミア』の魔女たちは直接ハリー・ポッターの影響を受けていると思われませんが、昨今のアニメは他にもさまざまな魔法学校を描いています——『青の祓魔師（エクソシスト）』（2011年）における「正十字学園」の宗教的魔術から、『魔法科高校の劣等生』（2014年）のハイテク魔術に至るまで。この二つはどちらもイギリスとのつながりを明示しているわけではありませんが、他には魔法学校ものというジャンルの影響がはっきり認められるアニメもあります。たとえば『フェイト/ステイ ナイト（Fate/stay night [Unlimited Blade Works]）』（2015年）では、日本にも強力な魔術師がおり、物語の大半は日本で展開しますが、真に魔法教育を修めることはイギリスでのみ可能なのです。そしてシリーズの終わりにあたって、主人公の凜（りん）と士郎は、ロンドンの国会議事堂の下に隠された「時計塔」と呼ばれる魔術協会総本部のカレッジで、彼らの魔術の訓練を完結させることとなります。

¹ ウィリアム・ホリングワース「イギリスでの生活は多くの日本人にショックをもたらす」『ジャパントイムズ』2014年8月29日。

(4) 世界規模の組織（ときには邪悪な、あるいは秘密の）の本拠地

魔法学校以外にも、アニメはしばしばイギリスを、秘密の、そして場合によっては邪悪な世界的組織の本拠地として描きます。典型的な例の一つは『コードギアス 反逆のルルーシュ』（2006年）です。ここでは日本が「神聖ブリタニア帝国」の植民地となっています。イギリスの力が軍事的なものではなく、魔術的、あるいは神秘的なものだという例もよくあります。

『R.O.D —READ OR DIE—』（2001年）では、紙を操る魔術を身につけたスパイや作員の国際的なネットワークが、ロンドンの「大英図書館特殊工作部」によって統括されている世界を目にします。彼らのモットーは「世界の本に平和を、本を粗末にする者には鉄槌を、そして大英帝国に栄光と知恵を！」です。『とある魔術の禁書目録（インデックス）』（2008年）では、英国国教会（作品中では「イギリス清教」と呼ばれている）が強大な組織となり、作員と魔術師の極秘ネットワークを駆使して世界中でその目的を追求しています。そして『DEATH NOTE』（2006年）には、ウィンチェスター近郊にある天才的な子どもたちの教育機関「ワイミーズハウス」が出てきます。国際的な探偵L、ニアそしてメロが養育されたのはワイミーズハウスにおいてであり、彼らは連続殺人者の夜神月（やがみらいと）の逮捕に力を貸すためにここから派遣されます。

これらの例はおそらく、今日の世界においてイギリスがどのようなやり方でその立場を維持しようとしているかということを反映しているのでしょう。すなわち、19世紀や20世紀初頭のように軍事的帝国主義の力を用いるのではなく、文化的な機関やいわゆる「ソフトパワー」（他国の尊敬や共感などを裏づけとする国際的影響力）を活用するというやり方です。BBC、イギリス連邦、（本物の）英国国教会、ブリティッシュ・カウンシル、そして国際金融の中心地であるシティ・オブ・ロンドンは、すべてイギリスの文化的影響力を維持するのに貢献してきました。同様に、イートン校などのパブリックスクール、オックスフォードやケンブリッジなどの大学は世界の指導者の子どもたちを惹きつけてきました。さらに英語という言語そのものがあります。英語は、19世紀にはイギリス帝国の、20世紀にはアメリカの力を通して普及し、世界的な第二言語となっています（『DEATH NOTE』の死神さえノートに英語で書き込んでいます！）。このことが、アニメにおいてイギリスがつねに陰謀の網の中心としての立場を占めていることを説明するのではないのでしょうか。

3. 英国ファンタジーとスタジオジブリ

ここまで私はアニメにおけるイギリスそのものの表象について話してきました。最後に少し時間をさいて、イギリスのファンタジー文学が日本のアニメ作品でどう用いられてきたかをお話ししたいと思います。もちろん『不思議の国のアリス』もその一例ですが、ここでは西洋で最もよく知られたアニメスタジオ、スタジオジブリに焦点を当てたく思います。ジブリはアニメ映画でしばしばイギリスのファンタジーを題材としています。しかしイギリスのファンタジー文学をどのように利用しているのでしょうか。またその結果、完成した作品はイギリスをどのように描写しているのでしょうか。

これらはそれほど単純な質問ではありません。たとえば、宮崎の『天空の城ラピュタ』にその名を与えた浮かぶ島ラピュタはもともと『ガリバー旅行記』に登場するもので、ガリバーは後に日本にも立ち寄ることになった三度目の航海でこの島を訪れます。しかしアニメ映画の他の部分はほとんどスウィフトの作品と関係ありません。浮かぶ島のアイデアはスウィフトから

来ているとしても、これをスウィフトの物語のアニメ化と呼ぶことはとてもできません。

それでもなお、どれほど多くのジブリアニメがイギリスの子どものためのファンタジー作品を原作としているかは注目すべきものがあります。

- ダイアナ・ウィン・ジョーンズ『魔法使いハウルと火の悪魔』（1986）→『ハウルの動く城』（2004）
- メアリー・ノートン『床下の小人たち』（1952）→『借りぐらしのアリエッティ』（2010）
- ジョーン・G・ロビンソン『思い出のマーニー』（1967）→『思い出のマーニー』（2014）

ダイアナ・ウィン・ジョーンズの小説『魔法使いハウルと火の悪魔』（1986）では、物語の大半はイギリスでなく魔法の国インガリーで展開します。しかし主人公のハウルはウェールズ人で（彼の本名はハウエル・ジェンキンス）、魔法によってウェールズからインガリーへやって来たのです。ある場面で、ハウルはもう一人の主要登場人物であるソフィー（インガリー生まれ）を20世紀のウェールズへつれて行きますが、彼女はそこで子どもたちがコンピューターゲームで遊んでいるのを見てびっくりします（彼女はそれまでファンタジー世界から出たことがなく、当然ながら子どもたちが魔法を使っているのだと思い込むのです）。小説のこの場面は、そして、よく知られた英詩を魔法の呪文として用いるなど、他のイギリス的な要素のいくつかも、ジブリのアニメから削られています。そのためこの映画はもっと一般的な、中央ヨーロッパ風のファンタジー世界を舞台とするものになっています。

『ハウルの動く城』について、またジブリによる他のいくつかの映画についても「舞台となっているのはどこことなくヨーロッパ的な場所だが、その住民の人種や国籍が何なのかははっきりわからない」²ということができます。（これは『天空の城ラピュタ』原案についての宮崎駿のコメントから引用したのですが、『ハウルの動く城』や『魔女の宅急便』についても同じことが言えないでしょうか？）ダイアナ・ウィン・ジョーンズ自身、宮崎の映画を称賛しましたが、それでも「生身の俳優が『ハウルの動く城』でハウルを演じるとすれば、私は宮崎アニメのハウルのようなきれいな顔立ちの人物は選ばなかっただろう。私ならウェールズ人の俳優で、長くて角張った顔の、彼なりに十分ハンサムではあるが、“きれい”ではない人を選んだら」とコメントしています。ハウルがウェールズ人であることは彼女にとって重要なことだったのです。

皮肉なことに、『天空の城ラピュタ』の方が『ハウルの動く城』よりもウェールズを描写しています。映画に出てくる鉱山の村の描写は、宮崎が1984年、長く厳しい労働争議のさなかにウェールズの鉱山地帯を訪れた経験にヒントを得たものだからです。宮崎は後に新聞記者に「私はこの男たちに感嘆する…生き方を貫くために戦う彼らの姿に敬意を表する」³と語っています。共同体に対する彼らの意識は『天空の城ラピュタ』の鉱夫たちの村に反映されました。『ハウルの動く城』からウェールズが削られたとすれば、それは、ファンタジー的な要素ではなく、きわめて非魔法的な産業社会の政治状況を活用する形で『ラピュタ』に挿し込まれたのです。

² 宮崎駿「『天空の城』原案」『出発点—1979～1996』サンフランシスコ：ビズメディア、1996年、pp. 252-55: 253.

³ ザン・ブルックス「アニメーターの神」『ガーディアン』2005年9月14日。

<https://www.theguardian.com/film/2005/sep/14/japan.awardsandprizes>（リンク先は英語サイト）

創作活動とは本当に展開の読めないものです。

先に挙げた映画には他にも、原作のイギリス的要素がある意味で隠されているものがあります。メアリー・ノートンの『床下の小人たち』（1952）は、人間の家の中で隠れて暮らす小人たちの一家を描く物語ですが、ベッドフォードシャー州のレイトン・バザードという町の近辺が舞台となっています。しかしそれがジブリの『借りぐらしのアリエッティ』として翻案されたとき、物語の舞台は日本へ移されました。同様に、ジョン・G・ロビンソンの『思い出のマーニー』（1967）もとの舞台はイングランド、イーストアングリアの海岸ですが、アニメでは北海道に移されています。

もちろんこれはさして驚くべきことではありません。これらの映画は結局、日本の視聴者向けに作られたのですから。スタジオジブリの設立よりずっと前に、アメリカのスタジオは半ば習慣的にイギリスの物語をとり上げてはアメリカ映画に作りかえていました。たとえばH・G・ウェルズの『宇宙戦争』はもともとロンドン近くのサリー州が舞台ですが、映画ではカリフォルニアに移しかえられています。同様に、最近の『DEATH NOTE』の映画化でも物語が日本からアメリカへ移されました。こうした例は数多くあります。

しかしながら、原作のイギリス的要素はどちらのジブリ映画にも残されています。『借りぐらしのアリエッティ』では、翔（しょう）の祖父が「小人たち」を住まわせるために作らせた人形の家は、実際にイギリスで作られたものだということが語られます。

元々はね、私の父がイギリスに注文して、小人たちのために作られたものなの。

私にはこのちょっとした設定は、『借りぐらしのアリエッティ』の物語そのものがイギリスで作られたということを視聴者が認識する手がかりになっているように思えます。さらには小人たち自身の描かれ方に注目すべきでしょう。アリエッティは両親とは違って赤い髪をしていますが、これは日本人にはほとんど見られない一方、イギリスでは珍しいことではありません。また映画は登場人物に「翔」「貞子おばさん」「ハル」という日本名を与えていますが、小人たちの名前は変わっていません。「ポッド」や「ホミリー」は英単語から借りた名前です。このことは小人たちが、家に住む人間たちとは、大きさの点だけでなく人種の点でも違うということを示唆する効果ももっています。

『思い出のマーニー』のマーニーの外見はさらに印象的なものです。彼女は長い金髪で、まるでアリスのようです。これは原作の小説でも同様ですが、そちらはとくに説明を必要としません。なにしろ金髪の少女はイングランドでは珍しくないのですから。とはいうものの、小説においてもマーニーが金髪だということは、彼女にまつわる非現実的な感じにながしかの効果を加えています。白いナイトドレスを着た金髪の彼女はどこか幽霊のように見えます。「彼女は長い薄手のドレスをまとい、淡い色の髪はいく筋もの流れとなって肩にかかっていた」（p.54）北海道という映画の舞台の中ではマーニーの外見はいっそう衝撃的です。そしてマーニーから受け継いだ杏奈（あんな）の青い瞳は、彼女がヨーロッパ系の先祖をもつことを印象づけます。マーニーの家も驚くほど西洋的なデザインです。マーニーもその家もイングランドから日本へ持ちこまれたかのようです。日本という背景の中でそれらはより非日常的に、そしておそらく、魔術的に感じられるようになります。

最新的话题を提示して話を終えることにしましょう。『借りぐらしのアリエッティ』と『思い出のマーニー』はどちらも米林宏昌監督の手になるものです。今日（2017年7月8日）米林監督の新作で、スタジオポノックの第1作である『メアリと魔女の花』が公開されます。監督の

これまでの2作と同様、この映画もイギリスのファンタジー小説、メアリ・スチュアートの『小さな魔法のほうき』を原作としています。1971年に出版された『小さな魔法のほうき』はやはり魔法学校についての物語ですが、ホグワーツよりずっと禍々しい学校です。もちろん私はまだこの映画を観ていませんが、予告編で見るかぎり、メアリは明らかにアリエッティの赤毛とマーニーの青い瞳を受け継いでいます。

『借りぐらしのアリエッティ』や『思い出のマーニー』と異なり、『メアリと魔女の花』はイギリスという舞台設定を保持してもいます（原作はシュロップシャー州が舞台です）。私はこの舞台設定の違いが映画化にどう影響するかにたいへん興味をもっています。この作品によって、イギリスの子どものためのファンタジーを原作とする日本のアニメは、いわば里帰りしようとしている気がします——不思議の国という故郷へ。

末筆ながら、B&Bフォス・ファームハウスのキャロン・クーパーに謝意を表します。